

論文

教育課程改革の視点 —山口県の教育文化と教育政策の国際的動向を踏まえて—

吉村高男*1

キーワード：学習指導要領、カリキュラム、教育課程改革、コンピテンシー、教育文化

1 はじめに

現在、私達を取り巻く環境は、社会の情報化やグローバル化が進み、生活が豊かで便利になる一方、情報格差や経済格差が進み、少子高齢化現象による社会全体の活力低下が危惧されている。さらに、エネルギー・環境問題が深刻化するなど多くの課題が山積している。教育面においては、家庭や地域における教育力の低下、学校や社会における低年齢層の問題行動などが多発している。子供の基本的生活習慣の乱れや、学ぶ意欲・規範意識の低下も問題になっている。そのような中において、学校教育の果たす役割は、益々重要性を増していると言することができる。

さて、教育課程の概念についてであるが、1950年に学校教育法施行規則第25条で、「教育課程については、学習指導要領の規準による」と規定された。教育課程の内容と実践については、国レベル、学校レベル、教室レベルの3つの階層¹⁾と、「誰が、何を、どのように作り、実現していくか」という、内容的側面と経営的側面がある²⁾。それに類する概念として、欧米においては、成立目的の異なる様々な学校の教育プログラムを「カリキュラム」と総称しているが、元々はラテン語の「走る」(currere)から由来した言葉で、日本には第2次世界大戦後、アメリカから入ってきた概念である。教育基本法第1条にも規定されているように、学校教育の基本は「人格の完成」にあり、教科及び教科外の教育活動も含め、知・徳・体のバランスのとれた教育プログラムを教育課程として捉え、学習指導要領の中で、学習する目標と内容等が規定さ

れている。本稿では、「教育課程」と「カリキュラム」を広義の意味で同義語として扱うことにする。

日本の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校における教育課程は文部科学大臣が教育課程の基準として告示する幼稚園教育要領及び学習指導要領に基づいて、都道府県や市町村等の教育委員会が作成する解説や手引きを参考に、最終的には教育現場の各学校において詳細を定めている。

日本における教育の法的な位置づけについては、日本国憲法第26条において教育を受ける権利、教育を受けさせる義務、義務教育の無償が規定されており、教育基本法や学校教育法等において教育に関する様々なことが規定されている。さらに、初等中等教育の基盤をなす教育課程は、学校教育法施行規則の規定に基づき、学習指導要領の中で、その目標と内容が定められている³⁾。

本稿では、我が国における学習指導要領の歴史的変遷を踏まえ、最近の教育課程改革の国際的動向と山口県における教育・道徳文化を紹介する中で、今後の教育課程改革について有効な視点を示す。

2 学習指導要領の変遷

学習指導要領は、各学校における教育課程の編成、各教科、総合的な学習の時間、特別活動、道徳(小中で実施)等の目標や内容、さらに、卒業認定のための授業時数の取り扱いや各教科等の指導計画作成の配慮事項などに関する国の基準で、学校教育法施行規則を根拠に文部科学省が定めている。

*1 至誠館大学 ライフデザイン学部

次に、我が国の学校教育制度の歴史について、簡単に振り返る⁴⁾。1871年（明治4年）の文部省設置、1872年（明治5年）の学制発布以前の江戸時代後期には、幕府や諸藩が領内に設けた約270校の藩校や100校を超える郷校、数万校の寺子屋が全国にあったと言われている。1872年（明治5年）の学制発布により、全国の教育行政を文部省が統括する学区制を設けた。1879年（明治12年）の教育令により、それまでの学区制を廃止し、町村を基礎に小学校を設置する。1881年（明治14年）に「小学校教則綱領」が制定され、教科の内容、時数等が明記される。1886年（明治19年）に、帝国大学令、師範学校令、小学校令、中学校令が制定され、各学校種別の規定を整備することで、我が国の学校制度の基礎が確立した。1917年（大正6年）には、内閣総理大臣の諮問機関として臨時教育会議が設置され、教育改革についての審議、提案が行われ、中等学校以上の改革と拡充が急速に進展した。1941年（昭和16年）に国民学校令、1943年（昭和18年）に中等学校令が制定された。しかしながら、第2次世界大戦の激化とともに、教育の正常な機能はほとんど停止してしまった。

今日における学習指導要領は、第2次世界大戦後に始まった。連合軍最高司令官マッカーサーに提出された「米国教育使節団報告書」（1946年）の示す「生徒が出发点」でなければならないとする米国の進歩主義教育に基づいたカリキュラム構成論が中核をなしており、各学校の裁量権が大きく、学校教育の手引き書としての役割をなしていた。1947年（昭和22年）に制定され、1953年（昭和28年）までは「学習指導要領（試案）」という名称であった。

1951年（昭和26年）には、小中高、同時に学習指導要領の改訂版が制定された。それまでの「教科課程」が「教育課程」とされ、教科外教育活動も学習指導要領の中に含めるようにした。中学校の習字は国語科に、国史は社会科に統合され、体育科は保健体育科に改められた。

1956年（昭和31年）には、高等学校の学習指導要領が改訂された。1956年（昭和31年）度の第1学年から

学年進行で実施された。特別教育活動（HR、生徒会、クラブ活動）の時間数（週1～3時間）が規定された。

1961年（昭和36年）には、系統性を重視したカリキュラム構成が図られた。小中学校において、道徳の時間が新設された。教育課程の基準としての正確を明確化し、公立学校に対して強制力のある学習指導要領として施行された。小学校は1961年（昭和36年）度、中学校は1962年（昭和37年）度、高等学校は1963年（昭和38年）度の第1学年から学年進行で実施された。以降、学習指導要領の実施についてはこのパターンを踏襲している。

1971年（昭和46年）には、現代化カリキュラムと言われる濃密な教育内容を導入した。ソ連の人工衛星「スプートニク1号」打ち上げ（1957年）による、米国各界に起こった衝撃「スプートニク・ショック」は学校教育を充実し、科学技術を発展させようとしたが、その流れが日本にも波及したものである。カリキュラム内容が過密で、授業展開が速かったため、「新幹線授業」とも言われ、授業内容について行けない大量の生徒を生んでしまうという現象が現れた。

1980年（昭和55年）には、すでに述べた前回の現代化カリキュラムの内容が濃密で、教育現場の準備不足や教師の力量不足等もあり、授業について行けない多くの生徒が出現したため、授業内容を精選、削減を行った。ゆとりカリキュラムと呼ばれた。1976年（昭和51年）の中央教育審議会による、学習内容を削減する提言を踏まえての実施であった。しかしながら、私立学校ではあまり内容の削減を行わず、公立学校との格差がつき始め、特に都市部において、公立学校の進学実績の低下が明らかになった時期でもあった。中学校の選択教科の選択肢が拡大された。

1992年（平成4年）には、学習過程、変化への対応力を形成的に評価する「新学力観」に基づいた、個性を活かす教育を目指して改訂があった。教科の学習内容がさらに削減された。小学校で、1,2年の理科・社会科が廃止され、生活科の新設があった。義務教育における道

徳教育の充実を通して心豊かな人間の育成が重視された。高等学校では、社会科を地理歴史科と公民科に再編するとともに、家庭科を男女必修とした。

2002年(平成14年)には、教育内容のさらなる厳選が図られ、「総合的な学習の時間」の新設により、基礎・基本を確実に身に付け、急激に変化する社会の中で生き抜き、自ら学び、自ら考える「生きる力」の育成をすることが急務であることが強調された。

2011年(平成23年)には、ゆとりでも詰め込みでもなく、知・徳・体のバランスのとれた力である「生きる力」の育成を目指すカリキュラムが示された。2007年(平成19年)の中央教育審議会答申では、従来のカリキュラムの精選・厳選を図った教育内容については、成果があった一方で、学力低下など課題も残ると発表された。文部科学省は新しい学習指導要領を「ゆとり」や「詰め込み」ではなく、「生きる力」を育む教育とし、基礎的な知識や技能の習得と思考力、判断力、表現力の育成を強調した。

3 教育課程改革の世界的潮流

教育課程改革の国際的動向としては、多様化とグローバル化が進む中で、今日的に求められる資質・能力を定義する大規模な取り組みとして、OECD(経済開発協力機構)が組織した DeSeCo(Definition and Selection of Competencies)プロジェクト⁹⁾と、アメリカ連邦労働省が諮問した委員会による SCANS(Secretary's Commission on Achieving Skills)プロジェクト¹⁰⁾を挙げることができる。OECD が組織した DeSeCo は、グローバル化が進む社会において、国際的に重要となる能力を定義し、その評価と指標の枠組みを開発することを目的としたもので、1997年から2003年にかけて議論された。諸学問領域の専門家と各国の政策担当者による協働を通して、最も重要とされるコンピテンシーとしての資質・能力が検討された。コンピテンシーの定義としては、「特定の状況の中で、技能や態度を含む、心理社会的な資源を引き出し、動員して、より複雑な需要に応じる能力」とされ

た。そこでは、3つのキー・コンピテンシー「相互作用的に道具を用いる力」、「社会的に異質な集団で交流する力」、「自立的に活動する力」が提示された。これらの能力を教育現場で実現するための試みが、世界各国で教育政策への適用や教育課程改革として取り組まれている。さらに、このキー・コンピテンシーの概念は、PISA(Program for International Student Assessment) と呼ばれる国際的な学習到達度に関する調査においても、「相互作用的に道具を用いる力」の一部を評価可能なように、読解力リテラシー、数学的リテラシー、科学的リテラシーと具体化して問題の設定が行われている。この調査は、2000年から3年ごとに15歳児(高校1年生)を対象に、日本も参加して実施されている。

一方、アメリカ連邦労働省が諮問した委員会による SCANS プロジェクトでは、様々な職種の分析を通して、必要とされる資質・能力を明確にしようとしたもので、5つのコンピテンシー(資源、人間関係技能、情報、システム、テクノロジー)と3つの技能・特質(基礎的技能、思考技能、個人的特質)が抽出された。この流れに沿って提案された代表的なものが、「21世紀型スキル」¹¹⁾である。21世紀型スキルの枠組みは2つの部分から構成されている。まず、学生の教育に結果として求められるものとして、コア教科と学際的テーマ及び3つのコアスキル(学習とイノベーションスキル、情報・メディア・テクノロジースキル、生活とキャリアスキル)が挙げられ、次に、学習支援システムとして、スタンダードと評価、カリキュラムと指導、専門研修、学習環境を適切に確保することにより、教育システムの変革を促すものである。このことは、アメリカ国内だけでなく世界的な広がりがある。

日本においても、コンピテンシーに関わる政策上の用語として、内閣府による「人間力」、厚生労働省による「就職基礎能力」、経済産業省による「社会人基礎力」、文部科学省による「学士力」などが用いられ、様々な領域で人間育成の目標が示されている。

4 日本の教育振興基本計画

我が国における教育振興基本計画は、2006年（平成18年）に改正された教育基本法第17条に基づいて、政府として初めて策定したものである。改めて、教育立国を宣言し、我が国の未来を切り拓く教育の振興に社会全体で取り組んでいくことを目指すと同時に、国際社会をリードする人材を育成することを目的に、必要な予算を措置できるようにしたものである。改正された教育基本法の理念を実現するために、10年先を見据え、第一期教育基本計画は2008年（平成20年）から2012年（平成24年）までの5年間の計画で策定された。さらに、2013年（平成25年）から2017年（平成29年）までの5年間の計画として、第二期教育基本計画を示し、現在推進中である⁸⁾。

ここでは、我が国を取り巻く危機的状況として、少子高齢化の進展による社会全体の活力低下、グローバル化による国際的存在感の低下、雇用環境の変容、地域社会や家族の変容、経済格差の進行による教育格差の再生産・固定化、地球規模の食料・環境・エネルギー問題等を掲げている。

そして、それらを克服していくためには、我が国が持っている強みとして、科学技術力やものづくり力、多様な文化・芸術や優れた感性、勤勉性・協調性・思いやりの心、基礎的な知識技能の平均レベルの高さがあることをしっかり認識する中で、成熟社会に適合し、知識を基盤とした自立、協働、創造モデルとしての生涯学習社会を実現していくことが今後の我が国における社会の方向性としている。

その実現のために、教育行政の取り組むべき基本的方向性として、次の4つのビジョンを挙げている。

- (1) 社会を生き抜く力の育成
- (2) 未来への飛躍を実現する人材の育成
- (3) 学びのセーフティネットの構築
- (4) 絆づくりと活力あるコミュニティの形成

これらの内容を受けて、各都道府県において教育振興に関わる基本計画がつくられており、山口県においては、山口県教育振興基本計画⁹⁾（平成26年度～平成30年度）が5年間の計画で策定された。教育目標として、「未来を拓く たくましい「やまぐちっ子」の育成」が掲げられ、「やまぐちっ子」のすがたとして、次に示す3点が示されている。

- (1) 高い志をもち、未来に向かって挑戦し続ける人
- (2) 知・徳・体の調和がとれた生きる力を身につけ、他者とのつながりを大切にしながら力強く生きていく人
- (3) 郷土に誇りと愛着をもち、グローバルな視点で社会に参画できる人

そして、これらの「すがた」を実現する取り組みとして、学ぶ力・創る力・生き抜く力の「3つの力」と広い心・温かい心・燃える心の「3つの心」を教育現場で育むための具体的な教育施策が示されている¹⁰⁾。

5 山口県の教育・道徳文化

すでに述べてきているように、江戸時代には、藩校をはじめ、全国各地に多くの郷校、寺子屋、私学が設立された。中でも郷校は全国で108校あったが、防長（周防・長門：山口県）で19校もあり、校数の上でも全国一位の数であったことが分かる¹¹⁾。その意味でも、山口県には地域に教育文化が根付く土壌があったと言える。山口県で育まれた特徴的な教育文化及び道徳文化を語る上で、非常に有効と思われるものについて、次の3点を挙げたい¹²⁾。

- (1) 吉田松陰の行動力
- (2) 金子みすゞの宇宙観
- (3) 郷校「徳修館」の存在

5-1 吉田松陰の行動力

1830年(天保元年)に、吉田松陰は「杉虎之助」として萩で誕生した。父親が杉百合之助、母親が滝である。父親は萩藩の下級武士で収入が少なく、農業中心の生活をしてきた。杉百合之助には吉田大助、玉木文之進といった2人の弟がいた。虎之助は6歳の時に、吉田大助が亡くなり、「吉田大次郎」として養子に入る。吉田家は山賀流兵学師範の家柄で、虎之助は幼少の身でその8代当主となり後を継ぐことになった。吉田松陰の名前はいろいろあるが、この「松陰」や好んで使った「二十一回猛士」は号である。通称は最初が「虎之助」、後に「大次郎」、「松次郎」になり、最期は「寅次郎」であった。9歳にして明倫館の教壇に立ち、11歳にして藩主毛利敬親と多くの人の前で「武教全書 戦法編」の講義を行い、周囲の人達を驚かせた。松陰は行動、実践の人である。21歳の時、萩藩からの許可を得て、九州遊学の旅に出る。松陰が23歳の時、浦賀にペリーの乗った黒船が来航する。最初は長崎に停泊中のロシア船に乗り込もうとするが、ロシア船はすでに出港していた。松陰は、再び日本に来航して、下田に停泊していたペリー艦隊に乗り移り、当時では死罪にあたる密航を企て実行する。日本語ができるウィリアムズが対応し、ペリーは松陰らの志を喜んだが、日本との条約があるため、渡航を手伝うわけにはいかないことを告げられる。このようにして、松陰の企ては失敗に終わり自首を決意する。萩藩主の毛利敬親による温情もあり、実家での「幽囚」の身となる。出獄から3日目から、松陰は幽囚室で家族や近所の人を相手に「孟子」の講義を始める。人が多く集まるようになり、やがて松下村塾(図1、2)で講義を行う。塾生の中には、松下村塾の四天王と言われ、明治維新の原動力となった高杉晋作、久坂玄瑞、吉田稔麿、入江九一を始め、初代首相となった伊藤博文や山縣有朋、山田顕義などがいた。学問とは、出世のためではなく、時代を知り、国のために役立つ力を育てること、これが松陰の教育方針であった。松陰は外

国からは、進んだ知識をしっかりと吸収することを目指していたが、日本の国を守るためには、外国からの侵略を打ち払うこと、即ち「攘夷」が必要だと考えていた。松陰は幕府への痛烈な批判を強めることにより、再び囚われの身となる。江戸に送られた松陰は、評定所による取り調べの中で、老中暗殺計画を画ったことを告白する。そのことで、判決が死罪となり、処刑は即日行われた(1859年)。享年30歳であった。

松陰が生涯をかけて示したことについては、次に述べる4点が挙げられる。

まず、「至誠」の心で何事にも取り組んだということである。「至誠にして動かざる者、未だ之あらざるなり」と孟子の言葉にあるように、松陰による説明で人の心が動かないのは、松陰自らの真心が足りないからだと考えていたようである。

次に、「知行合一」ということである。何事も本質を見据え、行動に移すことによって世の中は動くということ、松陰は全身全霊で持って示していった。

さらに「長所・個性を活かす個別指導」を徹底して行ったということである。塾生の興味・関心に寄り添い、自らの発問に自ら答えていけるように適切な資料・書物と助言を与え、お互いが議論できる雰囲気を実践的に創り出していたようである。松陰自身の和魂漢才に裏付けられた奥深い研究がバックボーンとしてあったからこそと言える。人が持つ長所に気付かせ、熱く燃えることで、自らの短所をカバーし、人間として成長していくという理想的な教育が松下村塾には存在していた。

最後に、孟子の性善説に則った不断の努力をしていたということである。人間には、本来備えているものとして「憶隠」、「羞惡」、「辞讓」、「是非」の4つの「四端」と呼ばれる心・能力があるが、学んで努力することにより、最終的に目指すべきものとしての仁・義・礼・智の徳を身につけることができると考えていた。まさに、松下村塾には教育文化の原点があったと言える。



図1 教育文化の原点「松下村塾」



図2 松下村塾の講義室

5-2 金子みすゞの宇宙観

金子みすゞは、1903年（明治36年）現在の長門市仙崎（図3）で誕生する。本名はテルで、「みすゞ」は童謡詩を投稿した際のペンネームである。父親は庄之助、母親はミチである。母親のミチは、後にみすゞの子ふさえを育てる。みすゞには、2つ年上の賢助と2つ年下の正祐がおり、3人兄弟であった。みすゞが3歳の時、父親は清国で反日デモに遭い亡くなる。31歳であった。母親の妹フジが嫁いだ下関の書店の上山文英堂に、1歳の正祐が養子として入る。1920年（大正9年）、みすゞは大津高等女学校を首席で卒業する。その際、答辞を読む。1923年（大正12年）、下関の上山文英堂

に移り、童謡詩の投稿を始める。当時の著名な詩人である西条八十にみすゞの才能が認められる。1926年（大正15年）2月に結婚して、11月にふさえが誕生する。夫の放蕩な日常生活が原因で、1930年（昭和5年）2月に離婚する。同年3月10日に服毒自殺をする。享年26歳であった。



図3 金子みすゞが生まれ育った仙崎

ところで、金子みすゞの詩¹³⁾のすばらしさは、誰にも分かる言葉で表現されており、あらゆる分野の人達が、それぞれの立場から、それらの詩を通して深い哲学的情感を覚えるということである¹⁴⁾¹⁵⁾。

最近の物理科学は急速な進展が続いており、特に、ミクロな世界を追求する素粒子物理学と、マクロな世界を追求する宇宙物理学との、奥深い繋がりが明らかになってきており、宇宙の始まりに限りなく近づいていることが興味深い。その本質を平易な言葉で、誰にも分かるように表現している詩が「はちと神さま」である。

一般に、教育現場で行っている自然・社会・人文分野における教科の内容は、宇宙進化、化学進化、生命進化、さらに、人類の歴史を通して築き上げられてきた、様々な階層の姿や蠢きの認識を深めている作業だと言っても過言ではない。その様々な階層が、最近の物理科学の追求により、日常の世界とマクロな宇宙の

世界及びマイクロな素粒子の世界が「ウロボロスの蛇」(図4)のように一つに繋がることが分かった。まさに、私達人類は現在、すべてが繋がる不思議を体験していると言える。

「はちと神さま」

はちはお花のなかに、
お花はお庭のなかに、
お庭は土べいのなかに、
土べいは町のなかに、
町は日本のなかに、
日本は世界のなかに、
世界は神さまのなかに。

そうして、そうして、神さまは、
小っちゃなはちのなかに。

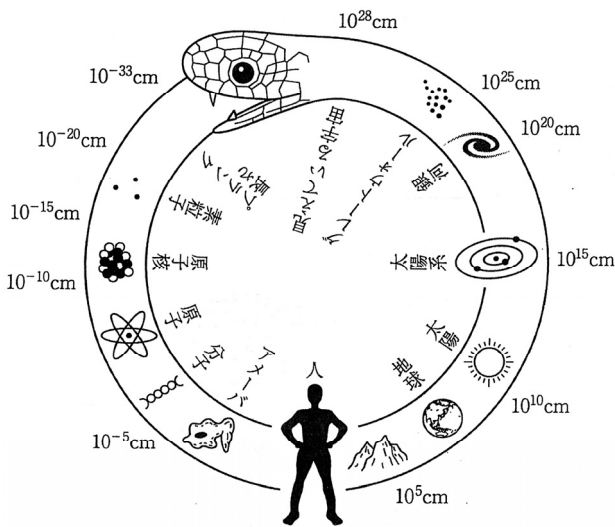


図4 ウロボロスの蛇

(佐藤勝彦著「宇宙論入門」岩波新書より引用)

さらに、私達が学校教育で習ってきた原子論、即ち、アトミズムに代表される「メンデレーフの周期表」に存在する元素が、宇宙に存在する物質のすべてではないことが、最近の宇宙観測によって明確になってきている^{16) 17)}。私達が知っている元素は宇宙全体のエネルギー

の5%に過ぎず、銀河の安定性等に必要な未知の重力源である暗黒物質(約27%)、さらに、数十億年前から宇宙加速をもたらしている未解明のエネルギーである、暗黒エネルギー(約68%)の存在がある(図5)。

この件については、金子みすずの詩「星とたんぽぽ」が、このあたりの事情を想起させる平易な言葉で巧みに表現している。

「星とたんぽぽ」

青いお空のそこふかく、
海の小石のそのように、
夜がくるまでしずんで、
昼のお星はめにみえぬ。

見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬものでもあるんだよ。

ちつてすがれたたんぽぽの、
かわらのすきにだまって、
春のくるまでかくれてる、
つよいその根はめにみえぬ。

見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬものでもあるんだよ。

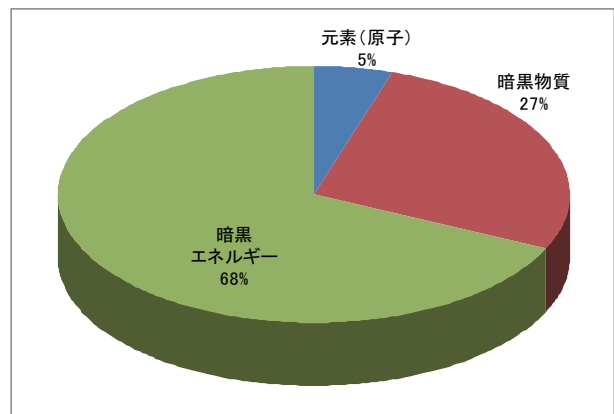


図5 宇宙エネルギーの構成図

ところで、1人ひとりの個性と長所を大切に、様々なことが共生する、多様性を認めた教育の原点が松下

村塾にはあったと言えるが、金子みすゞの詩「私と小鳥と鈴と」はそのことを言い当てており、教育の本質に迫る表現がそこにはある。

「私と小鳥と鈴と」

私が両手をひろげても、
お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のやうに、
地面を速くは走れない。

私がからだをゆすっても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のやうに、
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

5-3 郷校「徳修館」の存在

郷校「徳修館」(図6)は、毛利藩における八家の一つである宍戸家の宍戸就年によって、熊毛三丘に、士民教育振興のために1809年に創立された¹¹⁾。初代館長は萩明倫館学頭の山田北海である。「徳修」の由来は、尚書(書経)巻5の説明(下)篇に「惟(ソ)れ教うるは学の半ば、終始を念(オモ)いて学に典(ツネ)なり、その徳修まりて覚ゆるなし」とある「徳修」に基づいている。即ち、「自分の学問がまだ道の半ばであることに気付く人こそ、真に他を教え導くことができる。教えること、学ぶことは表裏一体である。謙虚な気持ちでたゆまず学問の道をきわめるとき、徳は自然に修まり、ほとぼしり出た徳は大いなる力となり、国家社会の進展に貢献する。しかも、自らは無為自然にして何らこだわるところがない。」ということで、教育・学問の世界において、私達が日常的に鍛錬し、習得すべき深い本質がここには語られていると言える。

教育基本法では、徳育とともに、知育・体育との調和のとれた人間形成を基本に、その基盤となる食に関する指導を通じて、適切な食習慣を身に付けること、即ち食育の重要性が述べられている¹⁸⁾。

そこで、「徳修館」における教育理念を踏まえ、食育、知育、体育、徳育の日常的な鍛錬の中で、循環する順序性、構造的性について、次のように図式化することを提案したい。

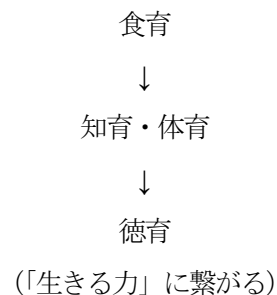


図6 郷校「徳修館」
～山口県立熊毛北高等学校の前身～

即ち、健全な食習慣のもと、的確な科学観に則った知育、体育の実践は、自ずと人間としての徳が高揚され、修まり、集団・社会の中において適切な関係を築けるようになる。そのことは、様々な課題を抱える、現在の国際社会の中において生き抜き、今後の希望に満ちた、新たなステージを切り拓いていく力にも繋がっていくはずである。

6 おわりに

本稿で述べてきた内容は、今後の教育課程改革を推進する上での重要な視点と教育的潜在力を示していると言える。すでに見てきたように、世界各国における様々な分野においてグローバル化が進展する中で、社会や産業界が求める資質・能力を育成し、各国における国力を維持するために、学校教育における教育課程改革を積極的に行うことは大切なことである¹⁹⁾。

しかしながら、その教育課程改革を地球環境・エネルギー・食糧問題といった地球的規模の課題解決に繋がると同時に、最近の科学の進展を踏まえた宇宙観・地球観・自然観を持ち、人類生存のためのより本質的な教育課程改革にも、私達は勇気を持って取り組む必要がある時代に入っていると言える。

これからは、ますます、私達の地球環境系が宇宙空間と繋がる開放系で、熱収支平衡系であること、さらに、地球環境は有限系であることを、私達はあらゆる場面で深く認識していく必要がある。全地球人による豊かな科学技術力の共有を進め、持続可能なエネルギー・環境・食料政策の実現を促す有為な人間育成の教育を創造していくことが、この太陽系第3惑星に居住する私達に課せられた急務である。

吉田松陰が死を賭して示した知行合一の精神、金子みすゞの詩の中に潜む宇宙観・人生観、「徳修」に秘められた教育の本質、といった山口県で生まれ、語り継がれている教育・道徳文化の中に、今後の教育課程改革を実行する上で、大きなヒントとなるものがある。

【参考文献】

- 1) 柴田義松；教育課程 カリキュラム入門，有斐閣，2000
- 2) 高野桂一；教育課程経営の理論と実際—新教育課程基準をふまえて—，教育開発研究所，1989
- 3) 保育所保育指針，厚生労働省告示，2008
幼稚園教育要領，文部科学省告示，2008
小学校学習指導要領，文部科学省告示，2008

- 中学校学習指導要領，文部科学省告示，2008
- 高等学校学習指導要領，文部科学省告示，2009
- 特別支援学校学習指導要領 文部科学省告示，2009
- 4) 学制百年史，文部省，1981
- 5) Swiss Federal Statistical Office；Definition and Selection of Competencies：Theoretical and Conceptual Foundations (DeSeCo)，Neuchatel，Sept. 1999
- 6) Trilling & Fadel；21st Century Skills：Learning for Life in Our Times，San Francisco，Jossey-Bass，2009
- 7) C. Dede；Comparing Frameworks for 21st Century Skills，Solution Tree Press，2010
- 8) 教育振興基本計画（第2期計画），閣議決定，2013
- 9) 山口県教育振興基本計画（平成26年度～平成30年度），山口県教育委員会，2013
- 10) 山口県教育推進の手引き（平成26年度版），山口県教育委員会，2014
- 11) 徳修館由来記；山口県立熊毛北高等学校，1975
- 12) 吉村高男；教育改革に活かす金子みすゞと吉田松陰の心，教育弘済会研究助成 教育実践論文，2005
- 13) 金子みすゞ；金子みすゞ童謡全集，JULA 出版社，1984
- 14) 吉村高男；金子みすゞの詩と最近の宇宙観，日本物理学会中国・四国支部学術講演会講演予稿集，126，2012
- 15) 吉村高男；金子みすゞの詩と最近の宇宙観，山口福祉文化大学研究紀要7，51-58，2013
- 16) D. N. Spergel et al.；First Year WMAP Observations and Determination of Cosmological Parameters，arXiv:astro-ph/0302209v3，17 Jun. 2003
- 17) Planck Collaboration：P. A. R. Abe *et al.*；Planck 2013 Results x vi Cosmological Parameters，Subjects：Cosmology and Nongalactic Astrophysics，arXiv:astro-ph/1303.5976v3，20 Mar. 2014
- 18) 教育小六法（平成26年度版），学陽書房，2014
- 19) 吉村高男；小中高大連携によるカリキュラム研究，山口県ひとづくり財団 研究報告書，2007

Viewpoints of Curriculum Innovation - Based upon the Educational Cultures in Yamaguchi and the International Trend of Educational Policies -

Takao YOSHIMURA

Abstract

Curriculum supports school education. Contents of the curriculum are reflecting the times and the traditional culture of a country. The school curriculums are innovated periodically in Japan. They are prescribed by the Government Guidelines for Teaching. The key word of curriculum for today is to cultivate children's "zest for living".

In an international trend of educational policies, there are two main projects. One is "DeSeCo(Definition and Selection of Competencies)" project submitted to OECD (Organization for Economic Cooperation and Development). The other is "SCAN (Secretary's Commission on Achieving Skills)" project submitted to Federal Ministry of Labor of USA. The common key word of the projects is "competency" living through 21st century.

By the way, we have prominent educational cultures in Yamaguchi. We can show you three typical examples. Firstly, we point out the Shoin Yoshida's private academy: Shoka Sonjuku. Shoin Yoshida fostered many patriots who accomplished the Meiji Restoration in the Shoka Sonjuku. Secondly, we point out Misuzu Kaneko who composed children's poems written in simple language with fruitful educational philosophy. Last of all, we point out the existence of "Tokushukan: a local school founded in the Edo period" in Kumage town. "Tokushukan" had the essence of education in the spirit of the school. New visions of curriculum innovation are proposed in this paper based upon the educational cultures in Yamaguchi.